

# ブロックレベルにおける活動支援 事業実施結果報告書

(令和5年度ウェブサイト公開用)

法人名
特定非営利活動法人 エイブル・アート・ジャパン

① 事業内容	<b>ア 都道府県の支援センターに対する支援</b> 南東北・北関東ブロックは、令和6年4月現在、6県すべてに障害者芸術文化活動支援センター(以下、支援センター)が設置された。宮城県(平成26/2014-)・栃木県(平成29/2017-)・福島県(平成31/2019-)・山形県(令和2/2020-)・群馬県(令和5/2023-)・茨城県(令和5/2023-)が活動した。障害者芸術文化活動普及支援事業以後、令和3年度に当該ブロックの支援センターが初めて設置され、令和5年度は3年目の活動となった。 令和5年度は、支援センター発足初年度である群馬県と茨城県の個別の支援、広域にわたるブロック内の支援センター間の情報交流や対面での学びの機会の創出を行った。
	<b>■全体概要</b> 1. 6県の支援センターにおける課題(相談支援・事業評価・行政との協働等)を検証し、「ブロック会議」「ブロック研修」(同日開催で全5回、ウ.で詳細記載)、「事業評価」(研修の内2回、キ.で詳細記載)、「なんでも相談会」(3回)、実践研究「出稽古」を実施した。テーマにより各県の行政の担当者も参加した。 2. 支援センター運営の財源に課題のあった栃木県と茨城県の活動を支援した。(オ.で詳細記載) 3. 厚生労働省ならびに全国連携事務局のつなぎ役として、ブロック会議の場を活用し、各種連絡や資料の共有(運営サポートブック、全国連絡会議)、「障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画(第2期)」や障害者差別解消法等の法律の改正・制定のポイント等を共有した。
	<b>イ 支援センター未設置の都道府県の事業所等に対する支援</b> 未設置の県は無し。
	<b>ウ 芸術文化活動に関するブロック研修の開催</b> 1. ブロック会議・ブロック研修 各支援センターに不足している支援スキルやノウハウを具体的に学ぶことに努めた。  <b>■第1回「年間計画の共有」</b> 令和5年5月9日(火)(オンライン)、参加者22人 内容: 広域センターおよび各支援センターの令和5年度の年間計画について、ブロック内で共有した。広域センターが実施する研修や新規事業「出稽古」について意見交換した。  <b>■第2回「自治体と支援センターと協働で評価目標をつくろう」</b> 令和5年7月26日(水)(オンライン) 講師: 宮田智史(NPO法人ドネルモ)、参加者20人(キ.に詳細記述) <b>■第3回「注目!自治体のDX化&lt;作家・作品のデータベース化、情報</b>

発信、プロモーション(販売・ライセンス) >を学ぼう」

令和5年10月24日(火)(オンライン)

講師：磯村歩(一般社団法人シブヤフォント)、小林竜也(福島県支援センター、はじまりの美術館)、五味淵仁美(栃木県支援センター、もうひとつの美術館)、参加者18人

内容：コロナ禍以降、とくに活性化が進むDXの取り組みについて、ブロック内から2事例、それ以外で1事例の報告会をひらき、作品や作家のデジタルアーカイブ等を活かした取り組みについて学ぶ機会をつくった。

事例報告：

I. 栃木県支援センターによる令和5年度のアーカイブ事業

II. はじまりの美術館による「はじまりアーカイブス」の成り立ちと活用状況

III. シブヤフォントによるプロモーション(デザインを学ぶ学生と共創、区と連携した二次利用)

■第4回「実践研究『出稽古』の成果を共有しよう」

令和5年2月14日(水)(オンライン)、参加者：14人

内容：実践研究「出稽古」(2に詳細記述)の各県の成果を発表し、受け入れ先からのフィードバックを行った。

■第5回「自治体と支援センターと協働で評価目標をつくろう」振り返り

令和6年3月14日(木)(オンライン)

講師：宮田智史(NPO 法人ドネルモ)、参加者17人(キ.に詳細記述)

## 2. なんでも相談会

令和5年9月11日(月)、10月24日(火)、11月21日(火)(すべてオンライン)

「二次利用の研修の内容や講師について」、「出稽古の計画について」

「評価の手法について」等、個別相談に応じた。

## 3. 実践研究「出稽古」

自身の支援センターで不足している施策について見聞を深めることを目的とし、先進的に実践している当該ブロック内の地域を訪問し、実際にノウハウを学んだ。また出稽古に出向いた担当者も、自身の地域で実践してきた取り組みとその意義を、受け入れ地である支援センター担当者と関係者向けに発表した。これにより、支援センター担当者および事業の質的向上を目指した(茨城県のみ実施無し)。

■宮城県(訪問先：栃木県)

・目標：「第9回栃木県障害者芸術展 Viewing 展 2024@もうひとつの美術館」の会議への参加や設営の手伝いを通して、出展する個人や団体と作る展覧会のプロセスについて学ぶ。

・担当者による報告：展示方法など展覧会に関わる一つひとつのプロセスに出展者一人ひとりの感性やアイデアが活かされていることがわかった。それにより、展覧会に関わった実感、作品の見せ方の工夫の学び、次の展示や制作へのモチベーションにつながっていると感じた。

・受け入れ先への講師として：栃木県内の福祉事業所および支援センターの職員に対して、「宮城県内の二次利用の取組事例」についてレクチャーと質疑応答を行った。

■栃木県（訪問先：山形県）

・目標：山形県内でのネットワーク形成の事例をアート展を通し、その関係がどのように結ばれ、続き、発展していくのかをアート展や関係者の話を聞くことを通して学ぶ。

・担当者による報告：主催側と受け入れ側との思惑の違いや、事業をマネジメントしていく中で、行政・福祉・関係者の間にある考え方、動き方のギャップなど、実際に関わってみて感じたことなどを聞き、様々な立場、業種などが関わっていくところの難しさを考えさせられた。活動をしていく中で抱える疑問や悩みに共通するところがあり、そこに焦点を当てて解決していくと活動を広げたり深めていくことに繋がるのではないかと思った。

・受け入れ先への講師として：山形県の支援センター担当職員とその関係者に対して、栃木県での参加型展覧会における支援者と一緒に展覧会を作る方法やプロセスについて情報の共有を行った。

■福島県（訪問先：宮城県）

・目標：障害福祉分野以外の部署との連携を見聞きし、福島県においても他部署との連携を模索することで、支援センターとしての活動の幅を広げること。

・担当者による報告：ダンスやアウトドア、保護者たちの学び合い、公民館でのプログラムなど、障害のある方たちも参加しやすい学びの場の事例を聞くことができ、視野を広げることができた。支援センターとしても、今回の出稽古での学びを通じて、生涯学習的な側面へも視野を広げて今後の活動を計画していきたい。

・受け入れ先への講師として：宮城県の支援センター担当職員と宮城県内の福祉事業所の職員に対して、はじまりの美術館の企画展のプロセスについて（企画展のコンセプトの作り方、現代美術家や障害のある作家の選定等）、詳細なノウハウの提供を行った。

■山形県（訪問先：福島県）

・目標：「博物館・美術館におけるアクセシビリティ向上にむけての研修会～誰もが訪れやすいミュージアムの仕組みづくり～」に参加し、アクセシビリティ向上についてと、福島県博物館連絡協議会と支援センターとの連携の仕組みなどについて学ぶ。

・担当者による報告：美術館博物館に対してアクセシビリティの向上を協会などに直接訴えてもそれぞれ問題意識が違うので、美術館博物館側の仲間を作って一緒に企画していくことから拡がりを持つのではないかと思った。

・受け入れ先への講師として：福島県の支援センター担当職員と福島県障がい福祉課職員に対して、山形県における支援センター担当課（健康福祉部障がい福祉課）以外と支援センターの協働事例（①山形県産業労働部産業技術イノベーション課との協働「こうふくで山形」②県公募展と県内3市との協働展覧会）の紹介と意見交換を行った。

■群馬県（訪問先：山形県）

- ・ 目標：酒田市障がい者アート展「いいいろ いろいろ展」を視察し、行政担当者、運営メンバーとの交流を通じて、支援センターの県内ネットワークの実態、市町村による独自アート展の歴史や実現形態について学ぶ。
- ・ 担当者による報告：視察した酒田市主催のアート展は、あらゆる人に文化芸術の参加の機会をつくることを目指した「酒田市文化基本条例」をもとに、文化行政の担当者、社会福祉協議会、酒田市美術館の学芸員、支援センターの職員が協力して行っており、その実施体制に感銘を受けた。群馬県では、文化と福祉の活動が縦割りになっているため、今後このような連携を進めていきたいと考えている。
- ・ 受け入れ先への講師として：山形県の支援センター担当職員や関係者に対して、群馬県支援センターの3法人の運営実態および実施事業や地域特性等についての意見交換を行った。

**エ ブロック内の連携の推進**

- ・ ア.ウ.の事業はすべてブロック内の連携の推進を目的として実施した。
- ・ 「ブロック会議」および「ブロック研修」では、支援センター間のコミュニケーションを円滑にし、中間支援組織として互いの知恵や課題をわかちあい、ともに質の向上を図ることを目的にするようファシリテーションに努めた。

**オ 芸術文化活動に参加する機会の確保**

1. 「ブロック会議」「ブロック研修」「なんでも相談会」「出稽古」の事業を通じて、支援センター職員および事業の質的向上を図ることにより、各県の障害のある人の美術や舞台芸術等への参加や鑑賞の機会が充実することを旨とした。
2. 栃木県と茨城県に対し、障害のある人の芸術文化活動に参加する機会を創出するワークショップ企画の支援を行った。

**■栃木県**

栃木県の支援センターと連携し、障害の有無にかかわらず、子どもから大人までさまざまな人たちが集まり自由に創作活動ができるワークショップ「もうひとつのくらぶ」を実施。つくることそのものの楽しさを体感しながら、お互いの違いを認め合えるような場所、関係を作っていくことも目指した。

企画運営担当：梶原紀子、五味渕仁美(もうひとつの美術館)

講師：黒田太郎

補助員：友常みゆき

開催日、テーマ、参加人数：

[1]令和5年4月16日(日)、「手ぬぐいをつくろう」、参加人数：13人

[2]令和5年5月21日(日)、「ロール画用紙に描いてキレイを探す」、参加人数：16人

[3]令和5年6月4日(日)、「ダンボール箱に描こう」、参加人数：21人

[4]令和5年7月16日(日)、「半紙で版画 えがく・さがす・うつす」、参加人数：9人

[5]令和5年8月20日(日)、「おめんをつくろう」、参加人数：13人

[6]令和5年10月15日(日)、「ダンボール箱で遊ぼう」、参加人数：12人

[7]令和5年11月5日(日)、「大きな紙に描いて並び替えて遊ぼう」、

参加人数：8人

開催時間：各回13時30分～15時30分

会場：もうひとつの美術館ワークショップ室

SNS (FaceBook、instagram) 投稿数：各10回



写真：[5] 8月20日「おめんをつくろう」の様子

### ■茨城県

茨城県内における障害のある人の芸術文化活動を推進するため、茨城県内に活動拠点がある「障害福祉」に関わる個人や団体にワークショップの企画を公募した。その結果、採択された7つのワークショップが2024年1月から3月にかけて実施された。報告会を通じて、関係者のネットワークにも努めた。

#### [1]福祉とアート ワorkshop大募集

主催：特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン

事務局：NPO ちいきの学校、ROKUROKURIN 合同会社

協力：茨城県(障害者芸術文化活動支援センター)

募集期間：令和5年12月18日～12月25日

#### [2]福祉とアート ワorkshop オンライン報告会

内容：公募で採択された7つのワークショップの報告会をオンラインで行った。

開催日時：令和6年3月9日(土)、14時～16時

実施形態：オンライン(Zoom、YouTube LIVE)

参加人数：Zoom 40人、YouTube LIVE 最大同時視聴者数7人

視聴回数：YouTube 限定公開：24回

発表者数：7団体のべ10人

広報活動：Facebook 12回(招待：130名)、Instagram 1回

広域センターと現地事務局が行った過去の事業参加者へのメール通知：80件



写真：令和6年3月9日オンライン報告会の様子

- ・ 宮城県、山形県、福島県、栃木県にはそれぞれ関連する計画がある。
- ・ 群馬県は、令和5年度中に障害者文化芸術活動推進計画を「バリアフリーぐんま障害者プラン8改訂版(障害福祉分野における個別基本計画)」に新たに盛り込み、計画を策定した。
- ・ 仙台市(政令指定都市)は、令和5年度中に「仙台市文化芸術推進基本計画」を策定した。弊団体代表も「仙台市文化芸術推進基本計画検討懇話会」委員として参加した。

#### キ 事業評価及び成果報告のとりまとめ

1. 協働型評価手法を通じて、各支援センターの現在地を知る
  - ウ。「ブロック研修」の第2回および第5回において、支援センター担当者と自治体担当者が一緒に協働型評価を実施した。
    - I. 「自治体と支援センターと協働で評価目標をつくろう」、令和5年7月26日(オンライン)、参加者20人
    - II. 「自治体と支援センターと協働で評価目標をつくろう」の振り返り、令和6年3月14日(オンライン)、参加者17人
      - I. II.とも講師：宮田智史(NPO法人ドネルモ)
        - ・ 支援センターが取り組む「中間支援」や評価とは何か、なぜ支援センターと自治体担当者が一緒に「協働型評価」を行うのか、講師のレクチャーを通じて確認しあった。
        - ・ I.では「新・支援センターの現在地」として、群馬県/支援センター担当者と茨城県/広域センター現地事務局担当者が「障害者文化芸術活動普及支援ガイド」活動のコツチェックリスト(以下、チェックリスト)をもとにした分析を発表した。
        - ・ 各県ごとに支援センターと自治体担当者が一緒にチェックリストを活用し、とくに弱点となっている領域をひとつ抽出し、目標を設定し、発表した。3月にその振り返りII.を行い、支援センターと自治体が大切にしている視点や価値を確認しあった。



写真：令和6年3月14日「自治体と支援センターと協働で評価目標をつくろう！」の振り返りの様子

2. 全国連携事務局が実施する、当該ブロックの成果を報告書にまとめた。
3. すべての事業においてアンケートを実施し、「学びの大きかった視点は何か」「今後の支援センター業務に生かしていく作業は何か」を問い、参加者の回答と様子を汲み取りながら伴走支援に従事した。
4. 広域センターとしての活動を随時、県および広域センターのウェブサ

	<p>イトと SNS で社会に発信した。          ウェブサイト：投稿数 78 件、閲覧数 40, 103 件          SNS：投稿数 302 件、閲覧数 66, 567 件</p>
<p>②事業成果及び課題</p>	<p>1. 事業による成果</p> <p><b>ア 都道府県の支援センターに対する支援</b>          計画に記載した通り「第2期の基本計画において目指す姿」に留意し活動してきたため、以下、各目標に対しての成果を記載する。</p> <p><b>目標1) 障害者による幅広い文化芸術活動の更なる促進や展開</b></p> <p><b>成果1</b> 裾野拡大の視点における「物理的な拡大」としては、南東北・北関東の6県は、それぞれに面積が広いため、とくに山形県による市町村連携事業、群馬県の圏域事業のカウンター団体設置、等の取り組みに学びを得ている。</p> <p><b>成果2</b> 裾野拡大の視点における「表現の幅広さの拡大」としては、福島県の「きになるひょうげん」、山形県の「きざしとまなざし」（ともに公募展）のコンセプトや、茨城県の精神科病院や救護施設等の活動に学びを得ている。</p> <p><b>目標2) 文化施設及び福祉施設等をはじめとした関係団体・機関等の連携等による、障害者が文化芸術に親しみ、参加する機会等の充実</b></p> <p><b>成果1</b> 宮城県による文化施設（ミュージアム、劇場・音楽堂等）とのアクセス・プログラムやリラックスコンサートの開催支援について情報提供を活発に行った。福島県では2年目となる福島県博物館連絡協議会の研修の企画運営をサポートし、これを山形県担当者が出稽古により見聞した。この領域は全体としてまだ実践は少ないが、各支援センター担当者の問題意識および関心は高いため今後の活動が期待される。</p> <p><b>成果2</b> 栃木県は支援センターの拠点「もうひとつの美術館」で丁寧な展示計画の会議が重ねられており施設職員の人材育成に学びを得ている。また茨城県では県直営の支援センター事業を補完するかたちで「福祉とアート」のワークショップを公募したが7件の応募があり、県民の意欲や元支援センター準備室が2年をかけて作り出したネットワークを維持できたと考える。</p> <p><b>イ 支援センター未設置の都道府県の事業所等に対する支援</b>          未設置の県は無し。</p> <p><b>ウ 芸術文化活動に関するブロック研修の開催</b></p> <p>1. ブロック研修(第1回～第5回)</p> <p>行政の担当者が自分ごととして取り組みかつ関心をもってもらえるテーマとして「評価」をキーワードにした研修(第2回・5回)、研修で取り上げてほしいテーマとして関心の高かったDXの取り組みを学ぶ研修(第3回)、令和5年度の新規事業である実践研究「出稽古」の成果を共有する報告会(第4回)を実施し、次のような学びの声がうまれた。</p> <p>【アンケート(抜粋)】</p> <p>■第2回「自治体と支援センターと協働で評価目標をつくろう」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・支援センター職員：中間支援は、対象者が主体性を持たせるよう促し見守る視点も大切だということを改めて認識しました。県担当者に向かう方向性の確認ができたことはとても良かったです！</li> </ul>

・支援センター職員：評価の多義性のお話を聞いて、改めて「評価」と一口にいてもさまざまだとわかりました。そういった多義性を意識しながら、誰に向けてどんな指標の評価が必要なのか考えながら取り組みたいと思います。

・自治体職員：改めて協働で評価をする意義について考え、今年度の活動について話し合うことができて良かった。庁内の文化部門や教育部門との連携が課題だと感じているため、他県の取組を参考にしながら、課題を解決できるよう取り組んでいきたいと思った。

### ■第3回「注目！自治体のDX化「作家・作品のデータベース化、情報発信、プロモーション(販売・ライセンス)」を学ぼう」

・支援センター職員：データベース化は一見地味な作業ですが、それがあると色々な広がり生まれることを実感しています。また、シブヤフォントのようにそれをしっかり事業につなげていくのは、アートを仕事にしたいという方への1つのきっかけになると思うので、今後も注目していきたいです。

・全国連携事務局：作家・作品のデータベース化は、どういった作家・作品を取り扱うのか、データ化の方法(撮影・編集、作品カードの作成)、クラウドの選定方法など、最初に協議し決めることが多いというのが最初に感じたことです。現場の方々の努力なしではできないことだと思います。また、シブヤフォントさんの事例発表をお伺いした際に、アーカイブをどのように活用していくかといった具体的な視点もないと、アーカイブをつくったきりになる可能性もあるのかもしれないと思いました。

### ■第4回「実践研究『出稽古』の成果を共有しよう」

・支援センター職員：それぞれの活動について発表などで聞いてはいたものの、対面でお話を聞いたり質問したりできることでリアルな学びが深まった。今日の発表を聞きつつ、他県の支援センターとの交流から、当支援センターの体制や特色を再度考えるきっかけになった。

・広域センター職員：他の地域との交流によって、よりそれぞれ地域の独自性や強みが見えてくること、それに対する自信にも繋がるのが重要と改めて感じました。また、県の支援センター担当者が、他県での活動を知ること、新たに予算がつくなどして事業が動き出すことは本当に素晴らしいサイクルだと思いました。同じようなことで悩みを抱える/抱えていた→どう突破していくか、というところを共有しながら歩んでいけるのはブロックごとに研修を行う最大のメリットであると思います。今回の出稽古に参戦できていない茨城県としては、羨ましく思いました。

### ■第5回「自治体と支援センターと協働で評価目標をつくろう」振り返り

・支援センター職員：最初に決めた目標から変わってしまってもよいということ、またたとえば参加人数が少ない場合でも実施後の変化など質に注目することで数だけでない評価の軸を作れることなど学びになりました。

・支援センター職員：事業の評価を量的評価だけではなく、質的評価をどう表すか、それを行政の担当者と共有できたこと。

・近畿ブロック職員：評価ということを軸にすると事業に関する対話



の解像度があがり、次年度以降にむけても具体的なアクションの検討につながるということ。協働型評価では各センターの取り組みを個別に評価するにとどまらず、ブロックの中で何を価値とするかが対話のなかで浮かび上がってくるということ。

## 2. その他の成果

令和4年度に、福島県の支援センター運営団体である「はじまりの美術館」を通じて、福島県博物館連絡協議会における〔障害者等に対する合理的配慮に関する研修〕の相談があった。そこで弊法人が取り組むミュージアム・アクセス事業(文化庁委託)と連携し、博物館連絡協議会に加入する美術館・博物館の職員と学びの時間をもつことができた。なお、福島県在住の障害当事者が話題提供者となり講座をすすめるにあたり、福島県障がい福祉課の職員(支援センター窓口)であり視覚障害のある人と、福島県立特別支援学校の教員であり聴覚障害のある人を話題提供者として招くことができた。令和5年度もこれを継続して行った。令和5年度の研修では、話題提供者として普段からはじまりの美術館を利用している自閉スペクトラム症の子どもを持つ母親と、統合失調症の当事者を話題提供者として招くことができた。

## エ ブロック内の連携の推進

当該ブロックは、担当者1-2名体制の小さな支援センターが多く、ロールモデルが得にくい、仕事へのプライドや意欲の維持に課題があると感じてきた。そこで、令和5年度はとくに実践研究「出稽古」を通じて、支援センター職員間の関係性が深まること、また実際の見聞を通じて課題や知恵をわかちあうことにより、本業務の支援スキルの質の向上や意欲向上につながることを目指した。「出稽古」に対する評価は、アンケートから確認することができた。

### 【アンケート(抜粋)】

・広域センター職員：出稽古は本当に素晴らしいと思いました。与えられた機会だけでなく、どんどん県外の活動へもアクセスしていきたいと思いを新たにしました。

・支援センター職員：手探りのなかの出稽古でしたが、次年度も継続であればさらに良い形で実施できそうだと、みなさんの報告を聞いていても感じました。茨城県が出稽古を実施できなかったのが残念でもあるので、そういった点で次年度の研究会は茨城県での開催も良いのではないかと思います。

## オ 発表の機会の確保

栃木県と茨城県でそれぞれ障害のある人の芸術文化活動に参加する機会を創出するワークショップ企画を実施した。

### ■栃木県

栃木県の支援センターによる「もうひとつのくらぶ」は、毎回異なる内容の多彩なワークショップが行われ、のんびり自由に創作したり、講師と一緒につくったりと参加者それぞれのペースで参加することのできる場がひらかれた。

### ■茨城県

令和6年3月9日に実施した「福祉とアート ワークショップ オンライン報告会」では、公募で集まり採択された7つのワークショップの報告があった。ワークショップの企画者および視聴した参加者からは、次の声がうまれ、県内の横のつながりをつくることや取り組みの内容を共有することの意義が明らかとなった。

【アンケート(抜粋)】

・企画者(社会福祉法人職員)：私たちは大きな組織ですが、スタッフや職員も多く、横の繋がりやアートの活動がなかなか表に出ないことが悩みでした。救護という特殊な施設というのもあり、安全面ばかりを重視され、なかなか思うようなアート活動はできない、となかばしょげてましたが、今回のアートワークショップが法人内での認知や、注目のきっかけ、また法人を超えて繋がるきっかけになりました！そのおかげで、茨城県の救護協会からもアートワークショップの開催を提案されており、大きな理解にすすんだと感じています。

・企画者(社会福祉法人職員)：できないかもしれない、という考えも専門家にきくことで解決することができることやアートを切り口に自己表現や生きにくさなど自分と社会に向き合う機会が提供されることの大切さを感じました。

・視聴者：アートと福祉のコラボレーションについて、たくさんのアプローチの方法があるのだなあと思いました。利用者の生活の充実、職員のやりがいの双方に良い効果が生まれうること、企業との連携やホールに開くことで地域福祉にもつなげうることを実感できたような気がします。

力 自治体における基本計画策定の推進

- ・宮城県、山形県、福島県、栃木県にはそれぞれ関連する計画がある。
- ・群馬県は、令和5年度中に障害者文化芸術活動推進計画を「バリアフリーぐんま障害者プラン8改訂版(障害福祉分野における個別基本計画)」に新たに盛り込み、計画を策定した。
- ・仙台市(政令指定都市)は、令和5年度中に「仙台市文化芸術推進基本計画」を策定した。

キ 事業評価及び成果報告のとりまとめ

事業の実施により直接的に得る定量的データ目標(実施計画書記載)

⇒結果(達成率)は次の通り。

- ・ブロック会議と評価における取り組み：支援センターと自治体職員・テーマに関連した関係者等 15人×5回=のべ75人⇒結果：5回91人(121%)
- ・ブロック研修会：支援センターと自治体職員・テーマに関連した関係者等 15人×5回=のべ75人⇒結果：5回91人(121%)
- ・実践研究「出稽古」による参加者：障害のある人・支援センターと自治体職員・テーマに関連した関係者等 20人×6地域=120人⇒結果：5地域・84人(70%)

2. 課題

計画に記載した通り「第2期の基本計画において目指す姿」に留意し活動してきたため、以下、目標に対しての課題を記載する。

**目標3)地域における障害者による文化芸術活動の推進体制の構築**

**課題1** 令和5年度に新たに設置された群馬県では、第3者評価の仕組みが導入された。広域センターも評価委員として招聘されたため、「障害者芸

術文化活動普及支援ガイド」を活用して、協働型評価も併せて実施する提案をした。行政の担当者、かつ本事業で作成されてきたさまざまなマニュアル、ガイド、サポートブックの使い分けについても把握することは難しい。厚労省・全国連携・広域センター間で評価手法をさらに協議する必要もあると感じた。

**課題2** 南東北・北関東の6県には、障害者文化芸術活動支援センターがすべて設置されたが、活動への理解や促進の足並みをそろえるのは難しい側面もある。広域センターからのアプローチでは難しい相手方には、ひきつづき厚生労働省からの働きかけも依頼していく。